

一般社団法人

日本助産学会ニュースレター

巻頭言

第 27 回日本助産学会学術集会のご挨拶(第一報)

メインテーマ「助産学の知の探究と実践力の考究」

第27回日本助産学会学術集会 会長 島田 啓子(金沢大学大学院)

紫陽花に目を惹かれる季節になりました。第 27 回日本助産学会学術集会 (in 金沢) について、金沢から一言ご挨拶を申し上げます。近年の 3 月は名残り雪で足元の不安と、年度末の会場確保が困難で 5 月になりました。ご理解下さいますようお願いいたします。

**○日 時：2013 [平成 25] 年 4 月 30 日[火]プレカンファレンス、理事会、社員総会
5 月 1 日[水] ~2 日 [木] 学術集会**

○会 場：「金沢歌劇座」と「21 世紀美術館」

○懇親会：5 月 1 日[水] しいのき迎賓館 (会場から散策して数分、金沢城の横)

メインテーマは「助産学の知の探究と実践力の考究」です。前年 (in 札幌) 学術集会は ICM 採択の助産教育、実践能力など注目すべき企画で、それに接ぐ本学会のミッションをあらためて考えると、アカデミックに知を開発・創造・検証する術を発表し会員間で共有すべきと考えた学術集会長の願いが 2 点あります。二十数年前に若輩だった私は、研究生として御指導頂いた恩師から“助産の現象が十分にみえていないものを評価する研究はできない”と静かに諭されました。この視点をなぜ見過ごしたのか、これを機に質的に現象を探る知の探究が研究活動の始点となりメインテーマにした 1 点目です。同時に助産の専門性を社会に発信するとき、知のエビデンスを用いて助産実践の技や能力を実証、検証した成果を発表してほしい、が 2 点目です。この 2 点を若手の助産学会会員に継承して頂きたい、また本学会創立からご尽力された先輩諸姉にも交流に参加していただきたい願いのテーマです。ロゴマークは日本 3 大名園の兼六園の由来から 6 つのカラーリングをイメージしてデザインしました。テーマにそって講演をはじめ、ワークショップ、シンポジウムなど学術交流ができる海外の研究者や教育指導者を招聘する国際交流コーナーを検討しています。演題募集は臨床・教育等に関する研究成果と実践から生ずる研究疑問やベストプラクティスと考える、そうありたい実践報告の 2 部から構成予定です。多くの発表ができる会場を確保してありますので臨床の関係者にもお声かけくださいますようお願い申し上げます。

2 会場は杜の都の地で新緑を浴びながら散策し周辺には小径傍の小滝沿いに県立美術館、鈴木大拙館など多数あります。懇親会場のしいのき迎賓館では金沢城の夜景ライトアップを背にして寛げます。5 月連休は「黄金週間の金沢の風物詩」になりつつあるラ・フォル・ジュルネ金沢 (音楽祭 2013) が県立音楽堂を中心に北陸 3 県で開催予定です。遠方の皆さまには演題のご準備をはじめ、ご宿泊先などを早期に確保されますようお願い申し上げます。最後に、2 回目の金沢だけ来て良かった、一人で参加しても楽しかった、と思えるように関係者一同、心よりお待ち申し上げます。

平成23年度 一般社団法人日本助産学会 第1回学会総会報告

前庶務担当理事 砥石 和子

日時: 平成24年5月1日(火)12:10~13:10

会場: 札幌コンベンションセンター 大ホール

開会挨拶 (堀内理事長)

<報告事項>

1. **理事会・社員総会報告** (堀内理事長)
2. **新代議員・理事選挙結果報告** (堀内理事長)
代議員選挙・理事選挙について経過および結果が報告された。今回からオンライン選挙を導入したことが併せて報告された。
3. **平成23年度事業報告** (各担当理事)
4. **第26回学術集会準備状況報告**
(園生学術集会会長)
5. **平成23年度収支決算報告** (高田理事)
平成23年2月から平成24年1月までの平成23年度収支決算について報告された。
6. **監査報告** (竹内監事)
平成23年度収支決算について監査報告がなされた。
7. **定款の改定について** (砥石理事)
定款改定について報告があった。
* 役員の変更時期には、前期の役員がその年の学会総会を執り行うこととした。
* 学術集会長を社員総会で選任することとした。

8. 平成24年度事業計画案

(堀内理事長)
平成24年度事業計画について報告があった。会員より東日本大震災や原発事故の災害状況につき、学会として助産学の立場から何らかの貢献ができるとよいつの意見が述べられた。

9. 平成24年度収支予算案

(高田理事)
平成24年2月から平成25年1月までの平成24年度収支予算案について報告された。

10. 次々期第28回学術集会会長について

(堀内理事長)
次々期第28回学術集会会長について、昨日の社員総会で江藤宏美氏(長崎大学)が選任されたことが報告された。

次期第27回学術集会会長 挨拶

次期第27回学術集会会長 島田啓子氏より挨拶があり、石川県金沢市で平成25年5月1日~2日の日程で開催される旨、報告があった。

会員発言

会員より、今回の震災を受けて、災害に関する助産教育に学会としても力を入れてほしい旨、発言があった。

閉会挨拶

(福井副理事長)

平成23年度 一般社団法人日本助産学会 学会表彰者報告

前表彰関連担当理事 平澤 美恵子



<功 勞 賞 多 賀 琳 子>

多賀琳子氏は、1987年日本助産学会設立に当たり情熱をもって基盤づくりに協力し、第1回日本助産学会開催にご尽力され、1987年(第1期)から2002年(第5期)まで評議員として、1993年(第3期)から1999年(第4期)までは理事として15年間にわたり、学会の発展にむけてご活躍し貢献して下さいました。

また地域においては、60数年に及ぶ助産院院

長として1万人以上の助産に携わり、「心豊かな子育て支援」をモットーに地域母子保健活動を行って来ました。さらに多賀氏は大阪府助産師会の理事を務め、その実績を活かして1992年(社)日本助産師会会長に就任しました。会長職6年間に組織強化に向け3部会の設立のほか幅広い活動を致し、今日の(社)日本助産師会発展の礎を築かれました。これらの多様な活動は高く評価され、1987年優良助産師として厚生大臣表彰、1998年に勲5等宝冠章を叙勲されました。

<学 術 賞 中 村 幸 代>

中村幸代氏は、2011年聖路加看護大学院看護学研究科看護学専攻博士後期課程にて学位を取得され、現在、慶應義塾大学看護医療学部専任講師としてご活躍です。一貫して「妊婦の冷え」を研究テーマとして取り組み、「冷え性」を学術的レベルに深めました。論文としては「冷え性のある妊婦の皮膚温の特徴、および日常生活との関連性」、「冷

え性の概念分析」等があります。冷え性の概念分析を行い、日常用語として使用される「冷え性」の言葉を定義化し、「冷え性とマイナートラブルや苦痛との関連」を科学的根拠に依拠して、助産師の実践知に基づく妊婦の冷え対策のケアを解明しました。

これら妊婦の冷え症を学術レベルに高めた一連の研究は、助産学の発展に寄与することが評価されました。今後の継続的な研究の発展が期待されております。

<奨励賞 石田登喜子>

石田登喜子氏は、福島県立医科大学看護学部在職し後進の育成に務めてまいりました。2003年には「福島県における明治・大正生まれの開業助

産師の活動」を日本助産学会学術集会に報告しております。このように大学在職時代から、“助産師とは何か”、“よいお産とは何か”を思考し、1998年に「福島よいお産を考える会」を立ち上げて代表を務め、助産師の研修や実践活動を行ってきました。今般の2011年3月東日本大震災と原子力発電所の事故発生においては、石田氏のこれまで培ってきた人的ネットワークを活用し、行政や保健師など他職種との連携を図りながら継続的な支援に繋げ、災害への迅速でかつ柔軟な対応は、助産師活動のモデルになりました。豊かな人生経験と、地道な地域母子保健活動がより良い助産師活動として成果を挙げ、この功績は高く評価されております。

国際委員会・国際助産協働委員会報告

国際助産協働委員会 大石和代

2012年3月24日～4月1日まで主にニュージーランド北島を中心とした助産関連のスタディーツアーを実施しました。委員を含め27名の参加者でした。地域における助産活動、継続的なケアという概念が政策的にも制度的にも支援されている實際を視察することができました。下記に参加者の感想を掲載します[50音順]

NZの大自然、多くの助産師の先輩や仲間との出会いが大切な宝物になりました。お逢いしたNZの助産師さん達は本当に素敵な「魔女!?!」のような雰囲気を持っていました。何度も「女性中心のケア」という言葉を耳にし、助産師達が何を大切にケアにあたっているのかを肌で感じる事が出来ました。何より、助産ケアや環境を充実させていくための組織作りや活動に驚かされました。出産直後のご家族にお逢いした時、とても満足げな表情が印象的でした。沢山の学びの機会を与えてくださったことに感謝いたします。
家吉望み(東京有明医療大学)

ツアーで一番印象に残っているのは、お会いした助産師の皆さんが輝いていたことです。その輝きは助産師としての自信と誇りに満ちており自律した女性の強さと優しさを感じました。さらにその助産師の輝きの先には、女性が主体となり大切にされる周産期システムがあるということに喜びと安堵感を覚えました。自分自身への課題とパワーをもらったツアーとなりました。
井上尚美(鹿児島大学医学部保健学科)

助産施設の見学や助産師さんたちと交流し、NZの自律した助産活動を知ることができた。また、マオイ族の厳粛な儀式では、異文化に触れることもでき、多くの学びを得たツアーであった。現地で出産、子育てを

している日本人の母親や、助産師さんたちのステキな笑顔に出会い、心温まる有意義な時を過ごすことができた。

大野弘恵(愛知県 助産師)

ツアーでは、NZ在住の女性の声を聞くことができ、幅広い視点でNZの周産期システムや助産ケアについて学ぶことができました。NZの助産師のみなぎるパワーとNZの景色の美しさ、女性たち自身が受け身でないことに圧倒されました。しかし、日本の助産師や出産のケア全てが劣っている訳でもないことにも気づくことができました。今後、出逢った助産師仲間と共に日本の助産師のあり方について考えていきたいです。
奥山葉子(神戸市看護大学)

今回の研修は1月28日にミシェル・オダン先生の講演会で委員から声をかけていただき、参加を決めました。NZに行くのは初めてで、美しい景色に癒されました。NZの助産師は年5例以上の妊娠期保健指導・分娩介助・6週までの産褥ケアをしないと免許が継続できません。教員であっても同様でした。日本とNZとは事情は違いますが、私も分娩介助等実践での訓練を心がけたいと感じて帰ってまいりました。

黒田裕子(関西医療大学)

オークランドで見たヒカゲヘゴは、NZの植物のシンボルマークの「ぜんまい」という。これは、始まりとか、芽という意味があって、訪問先のマタニティユニットの壁やパンフレット等に頻繁に活用されていた。この巨大なシダヒカゲヘゴは、原始的で沖縄では天然記念植物になっている。NZの助産師は、女性に寄り添った、女性の本能的な面を引き出す自然分娩を行っているというのが、シンボルマークの「ぜんまい」のもつ意味と重なって、非常に印象的であった。実際に視察することで、NZの助産師が自律し、輝いて働いている

ことがよく理解できた。

小西清美(名桜大学人間健康学部)

NZ 研修に観光目的トリフレッシュで参加しました。NZ は自然が多いため花粉症が悪化し、夜も眠れない日が多く、辛い日々でした。花粉症の目薬・点鼻薬を持参していましたが、足りなくなるのでは？と不安もありました。NZ は秋なので花粉症に悩まされるとは思いませんでした。研修は、通訳の方がいらっしゃいましたが、参加者は英語が堪能な方ばかりで、直接の会話も多く、内容がわからないことが多かったです。

佐藤美奈子(帝京平成大学)

Pukekohe Maternity Hospital は、ガーデン風の丘庭に建ち、その窓から出産後の母子が見渡せる風景が、癒される見晴らしでした。病院という管理を払しょくさせて、心身共に爽快を感じさせてくれる環境でした。AUT では学部長はじめ、多数の教員が快くお迎えくださり、意見交換も丁寧にフランクにコメントしてくれました。今思い出しながら、もう一度食したい！と思うのは、休憩に準備された軽食のお寿司とケーキです。フレンドリーでおもてなしに優しさを感じました。Warkworth Maternity Unit でもお寿司が・・・美味しかったです。その準備の気配りに嬉しく思いますね。出産室には産婦ケアへの工夫が数々あり、自然のもてる力を発揮させる環境とは・・・と考えさせられました。最後にお着物を召して通訳をしていただいたドーリング景子さんに女性の癒し力をいただきました。

島田啓子(金沢大学大学院)

今回のスタディツアーは NZ の助産師システムの改革がその後どのように定着したか、現地の日本人利用者として話ができ、助産師と利用者の双方から知る良い機会となりました。残念ながら、日本と異なる助産師教育システム(ダイレクトエントリー)に変えたことの評価まではわかりませんが、今後の我が国の助産師教育システムやその内容について考える資料を得ることができたと思っています。

新川治子(広島国際大学)

NZ の助産師が女性のサポーターとして信頼され、専門職として自立を勝ち取っていった歴史、また妊娠から産後まで、1 人の妊婦に寄り添った継続ケアの母子保健システム、日本のシステムの問題点などにも気づかされた研修でした。ダイレクトエントリーの助産師教育の特徴や、LMC での統一したカルテが、妊婦と専門職で共有できていて、統計データも完全であり、どの段階であっても共有システムがある素晴らしさを感じました。大自然の美しさ、遠く離れた地でもお互いを思いやる人の優しさに触れる旅でした。

新小田春美(九州大学大学院)

NZ の助産師の誇りを持って活動する姿からたくさんの刺激をいただきました。また、日本とは異なる仕組みや考え方などに混乱したことがありましたが、NZ の

皆様、通訳の方々、協働委員の皆様のおかげで理解することができました。いつもは教育する側におりますが、今回学びを得るという立場で参加し、人に伝えるときに必要な温かさや丁寧さ等を改めて学ばせていただいた気持ちです。ありがとうございました。

武田江里子(浜松医科大学)

NZ のスタディツアーでお会いした助産師や教員の方はパワフルで自信に満ち溢れており、圧倒されました。AUT の教員の「Competent but not confident」な助産師から NZ の助産事情が変わり助産師の活動の場を国が整備し「Competent and Confident」となっていた、という言葉がとても印象的でした。NZ 助産師のパワーにあたり、まさにパワースポットを巡ったかのような気持ちで帰国しました。ありがとうございました。鶴見薫(金沢大学大学院医学系研究科保健学専攻)

女性達は妊娠すると、健康であればまず助産師の世話を受けたいと考えている。そんなNZの助産師を、うらやましいと思った。現在の日本では、真先に助産師を選ぶ女性は少なくなりました。助産師の存在感をしっかりと印象づけるシステムを築くことができないものかと考える旅であった。NZ の先住民マオリ族の出産と育児の習慣について知れたかったが、残念なことに、現代的な助産師から、それを聞くことはできなかった。オークランドの街角で見つけた“Illustrated Encyclopedia of Traditional Maori Life”(A.W.Reed 2001)が、私の宝物になった。

寺田眞廣(埼玉県 助産師)

広がる牧場と低い建物、マタニティユニットで出会った助産師さんたちの穏やかな雰囲気に癒された 9 日間でした。温かい笑顔の奥に感じられる信念と誇りに、“女性とともに存在する”助産師本来のあり方を再認識し、常に最新の知識と実践力を自らに課す厳しさと質の高さに、尊敬の念とともに一つの理想の姿を見た思いがします。日本で大きく制度を変えていくために、まず自分たちに何ができるのか。助産師同士、施設・臨床・教育の垣根を越えて協働すること、施設の中で助産師らしい働き方を実践し、看護のシステムとは違う働き方を提示していくこと、妊産婦さんたちと協働する形の実践をしていくことなど、まず自分たち自身が既成の枠組みを越えていくことから、何かが変わっていくような気がしています。

沼澤広子(国際医療福祉大学大学院助産学分野)

Maternity Hospital、AUT 大学の助産教育、地域助産としての LMC(Lead Maternity Caregiver)制度、開業助産師そして LMC により出産した日本人母子との交流会など盛りだくさんの企画をしていただいていた。NZ における一貫した Maternity services は日本とは大きく異なるバックグラウンドではあるが助産システムの制度を確立してきた助産師組織には学ばされるものが大きかった。国際母子保健の講義ならびにこれからの地域活動に多くの示唆を得たと同時に他大学の先

生方と交流できたこともまた貴重な体験となりました。
平田伸子(帝京大学福岡医療技術学部)

ツアーに参加した私の目的は、1. NZ の助産師の活動や教育について学ぶこと、2. NZ の助産師の DV の取り組みについて学ぶことでした。この二つの目的は見事達成され、女性の意思決定を支える助産師の一貫した姿勢に、私自身がエンパワメントされ充実感とともに帰国しました。今回の学びとご縁を今後の研究、教育、助産師活動に生かして頑張りたいと思います。一緒に参加したメンバーの方々と様々な思い出も決して忘れられません(笑)。
藤田景子(金沢大学)

今回 NZ の助産師や女性との交流を持つことができ、最も印象に残ったことは、LMC のシステムについて学べたことでした。8 割の女性が LMC として助産師を選択し、妊娠から分娩、出産まで継続して助産師がケアを行い、女性とともにあるという助産ケアが実践されていることに感銘を受けました。助産師資格取得のための教育システムについても学ぶことが多く、大変貴重な経験をする事ができました。
細川美千恵(高崎健康福祉大学)

5 年前の講演会で、NZ の助産システムについてカレン・ギラランド氏およびサリー・ペアマン氏より話しを伺い非常に興味をもちスタディツアーに臨みました。特に、LMC については学生に講義で話していますので、是非助産師さんたちから実際に話をお聞きたいと願っていました。印象に残ったことは数多くありますが、特に、助産師さんたちが生き活きと活躍している姿には感銘を受けました。正常出産は助産師の手で、私たちに訴えかけてくれました。
吉留厚子(鹿児島大学)

自立した助産師はいかにして養成され、実践されているのかを是非知りたいと思い、胸膨らませて始まった研修旅行でした。研修企画は素晴らしいものでした。マタニティユニットやバースセンター等の1次・2次医療の実際をみせていただき、助産師教育の先生方との交流もあり、女性主導のお産の支援とは何かについて考えさせられた日々で収穫は大きいものでした。もっと語学力があれば・・・。
弓削美鈴(佐久大学看護学部)

NZ では80%以上の女性が助産師を Lead maternity carer (ケアの責任者)として選び、医師との連携も社会的医療制度のもとで、スムーズにいつているようです。しかし、ローマは一日にしてならず、その現状は助産師、とりわけ女性たちの運動があつてこそその成果だということを学びました。日本では“おまかせします”ではない女性を育てることが、とても必要なのではないのでしょうか？
大石時子委員(東京保健医療大学)

NZ の助産師活動に触れるのは2回目です。今回は多くの助産実践家にお目にかかり、かつそこで出産された日本人の妊産婦さんともお話できて圧倒されました。特に、日本と NZ 両方での出産経験のある3人のお子さんの母親が、両国での違いについて「日本では産む施設を選ぶけれども、NZ は LMC (マタニティケア責任者、多くが助産師)を選ぶことが重要なこととなります。」とおっしゃっていたのが印象的でした。社会システムが違うので簡単には比較できないでしょうが、この20年で現在の女性中心のマタニティケアシステムを確立してきた NZ の助産師には今後とも学でいきたいと思います。
加納尚美委員(茨城県立医療大学)

NZ の助産師活動のコアは「妊娠から産後6週間まで」と焦点化されている。LMC によるローリスク出産のデータが蓄積される仕組みがあること、それらを職能団体が政策提言などに活用していること。誰と産むのかを選択できる「女性を中心とした」ケア実践とそれを支える制度の必要性について、再考させられる機会となりました。ローカルな場所で働く LMC 助産師は力強く誰も誇らしげでした。NZ で出会った皆さんとの語りあいにも多くの刺激を頂きました。
嶋澤恭子委員(神戸市看護大学)

今回のツアーは2010年から国際委員会と国際助産協働委員会が共同で準備を進めてきました。2011年には2月のNZ大地震、3月の東日本大震災と両国が相次いで震災に見舞われるなどの困難もありましたが、NZCOMの皆様を始め現地の皆様、通訳を担当して下さったドーリングさん、ウイルソンさんなど多くの方々のお陰で無事にツアーを終えることができました。都合により日程を短縮しての参加となりましたが、NZの助産師さんや参加者の皆様から多くの刺激を受け、私自身にとっても大変有意義な研修でした。ツアー中は皆様とゆっくりお話する時間が取れず残念でしたが、学会などでお会いした際にはお声を掛けさせていただきたいと思っておりますので、今後ともよろしくお願いたします。

五味麻美委員(川崎市立看護短期大学)

NZ では、女性を中心としたマタニティケアシステムとは、こういうことを指すのかと改めてケアのしぐみの重要性も認識しました。お会いした全ての助産師さんが、自然体でいながら力強く、自分たちの仕事について誇らしく嬉しそうに語ってくださる姿も印象的でした。そして、我々日本の助産師も熱く語り合い、歌やコントも楽しみ、良い出会いがあつたことに感謝いたします。また、ツアーに係る準備と実施工程において参加者の方のご理解とご協力にも重ねてお礼を申し上げます。
橋本麻由美委員(国立国際医療センター)

NZ では「妊娠がわかったらまず、どこで産もう？ではなく、どの助産師さんと産もう？と考えるんです」という言葉がとても印象的でした。女性たちは、LMC (Lead Maternity Carer) と呼ばれる助産師を自ら選び、妊娠から分娩、産後までを継続してみてもらえる安心と安全を得ます。助産師が自立していて、自信を持って働いているように感じました。一方では、日本の助産の良さも再認識したり、たくさんのパワフルな NZ の助産師さん達に出会い、元気をいただいたスタディツアーでした。

早瀬麻子委員(大阪大学大学院医学系研究科)

異常出産になっても妊娠から産後まで助産師の継続ケアが提供されるシステムが確立していることの強さを感じた。クリスさんが日本の助産に対して提言を下された。日本にはすでに助産所など家のような素晴らしいケアがあること、もっと周産期に特化した仕事をする事、学生には初診から産後まで継続ケアを10例実習させることが大事だと。NZ で出産された日本人女性の感想も印象的だった。日本では「どこで産むか」という選択しかなかったが、ここでは「誰と産むのか」という選択があったと。

毛利多恵子委員(毛利助産所)

平成 24 年度 一般社団法人日本助産学会 学会賞候補者の自薦または推薦の公募

表彰関連委員会 森明子

一般社団法人日本助産学会では会則 67 条第 1 項、第 2 項に則り、本学会の発展、あるいは学術領域において優れた業績があったと認められる学会員の表彰を行っております。学会賞として、次の表彰に該当されると思われる方は是非ご推薦下さい。

学会賞の種類及び資格、審査対象

1. 日本助産学会学術賞(以下、学会賞)

資格:5 年以上の日本助産学会の会員であること。

審査対象:

助産学に関連する一連の研究に対し 3 篇以上の原著論文を有し、且つこの中の 1 篇以上は、推薦年度を含む過去 3 年間に日本助産学会誌に発表していること。

2. 日本助産学会奨励賞(以下、奨励賞)

資格:3 年以上の日本助産学会の会員であること。助産実践者として活動歴が 10 年以上あり、助産実践の向上や開発に貢献していること。

審査対象:

応募年度を含む過去 3 年間に本学会に発表した助産実践者で、実践向上や技術開発への貢献が認められる者。

公募について

学術賞及び奨励賞は、会則第 67 条 1 項に定める受賞資格を有する者の自薦、又は本会員の推薦とする。

受賞者数

上記各賞とも若干名

応募方法

各応募申請書及び申請書フォーマットは、日本助産学会ホームページに提示する。

推薦応募書類

<学術賞>

- ①応募申請書(様式 1) 7 通
- ②業績の概要(200 字以内)(様式 2) 7 通
- ③申請論文 3 篇の別刷り又はコピー 7 通
- ④推薦書:他薦の場合のみ(様式 3) 7 通

<奨励賞>

- ①応募申請書(様式 1) 7 通
- ②業績の概要(200 字以内)(様式 2) 7 通
- ③本会で発表した抄録又は論文 1 篇の別刷り又はコピー 7 通
- ④推薦書:他薦の場合のみ(様式 3) 7 通

推薦応募締め切り 平成 24 年 10 月末日

各候補者の推薦応募は、上記の書類を添えて日本助産学会事務局に「推薦書類」と朱書きにして送付して下さい。

2013年度 日本助産学会 研究助成公募

学術振興委員会 葉久真理

応募締切日:2012年11月16日(金)必着

の他母子保健領域の学術的研究等。
助成額は、30万円以内/1件。

日本助産学会では、本学会の会則に基づき、助産学に関する研究を推進するために研究費用の一部を助成し、助産学の発展をはかり、わが国の母子保健に寄与することを目的に研究助成を行っております。

2013(平成25)年度の研究助成申請は、以下の要領にしたがって手続き下さいませようお願いします。

応募資格

日本助産学会員として2年以上加入している会員であること

研究分担者は会員であること(加入年数は問わない)

申請書の請求

日本助産学会ホームページ(<http://square.umin.ac.jp/jam/>)「研究助成案内」から【申請書】をダウンロードし、必要事項を記入の上、事務局宛にご請求ください。

研究課題

従来、委託研究と学術奨励研究について公募(それぞれ2件程度採択)しておりましたが、2013年度からは、学術奨励研究のみ公募し、3件程度採択することとなりました。

学術奨励研究

助産学の発展、助産実践の改善と開発、そ

助成者の決定および通知

助産学会理事会で審議、採否決定後、主研究者に通知します。

応募に関する留意点

申請書は、楷書(パソコン等での作成を推奨)でご記入ください。

申請書並びに別刷り、参考資料等の提出にしましては、ホームページの助成実施要項をよくご確認ください。

提出された申請書は返却しませんので予めご了承ください。

最終に提出された報告書は、原則として日本助産学会のホームページに掲載する予定です。

《問い合わせ先》

一般社団法人日本助産学会事務局
〒170-0004

東京都豊島区北大塚 3-21-10 アーバン大塚 3F
株式会社ガリレオ 学会業務情報センター内
TEL:03-5974-5310 FAX:03-5907-6364
E-mail: g019jam-mng@ml.gakkai.ne.jp

多数の方の応募をお待ちしています!

ICM募金の御礼と継続支援のお願い

一般社団法人日本助産学会事務局

川原淳子様からのお振込みと、第26回学術集会会場(札幌)で、青木康子様、有森直子様、安藤広子様、井村真澄様、江藤宏美様、恵美須文枝様、小木曾みよ子様、小田切房子様、加納尚美様、茅島江子様、北川真理子様、近藤潤子様、嶋澤恭子様、島田啓子様、島田三恵子様、鈴木江三子様、園生陽子様、多賀佳子様、高田

昌代様、高橋弘子様、高室典子様、竹内美恵子様、砥石和子様、平澤恵美子様、福井トシ子様、藤田景子様、堀内成子様、松岡恵様、丸山知子様、村上明美様、毛利多恵子様から募金をいただきました。

総額 40,630 円集まりました。皆様方の暖かいご支援とご協力、ありがとうございました。

引き続き下記の募金を受付けています。会員の皆様のご協力をお待ちしています。

☆ICMスポンサー・ア・ミッドワイフ(国際基金)☆

発展途上国の助産師の参加用援助としての募金です。

一口 2,000円

振替口座番号:00190-8-710931

加入者名:日本助産学会国際基金

☆ ICMセーフマザーフード基金 ☆

世界で妊婦死亡率・罹病率が最も高い地域における助産知識の発展を支援する募金です。一口 1,000円

振替口座番号:00240-8-6818

加入者名:日本助産学会ICMセーフマザーフード基金

事務局からのお知らせ

今年度平成24年度会費(10,000円)納入について

本学会は、皆様の会費をもとに運営しております。円滑な事業推進のため、会費納入がまだお済みでない方は早急に下記まで、氏名・会員番号等を通知の上、お振込みをお願いします。

・郵便振込:00120-2-763540 加入者名:一般社団法人日本助産学会
通信欄に会員番号と納入年度を明記

・銀行振込:ゆうちょ銀行(9900) 〇一九(ゼロイチキョウ)店(019)(当座) 0763540 一般社団法人日本助産学会
(シヤ)ニホンジョサンガクカイ) 氏名と会員番号を通知

学会誌投稿(共同研究者含)、学術集会演題応募(共同研究者含)、研究助成応募(研究代表者)等は、会員で該年度の会費納入済みが条件になります。応募される場合は、お早めに会費納入をお済ませの上、お申し込み下さい。また、会費納入が遅れますと学会の諸情報の送付が滞りますのでご注意ください。

なお、納入会費の領収書発行に関してはお手数ですが事務局宛にメールかFAXでご請求ください。

会費納入・会員番号等に関してご不明な時は、事務局までお問い合わせ下さい。

変更届について

住所等の変更に関しては、オンライン会員情報管理システム(詳細は下記)で変更手続きが出来ますのでどうぞご利用下さい。以下のホームページからID(会員番号)とパスワードをご入力の上、ログインいただき、ご希望の手続きを行ってください。

オンライン会員情報管理システム:<https://service.gakkai.ne.jp/society-member/auth/JAM>

ID・パスワードがご不明の場合は事務局宛お問合せ下さい。

オンライン会員情報管理システムがご利用になれない場合は、変更届の書式は問いませんが必ず書面(E-mail・FAX・はがき等)に明記して、その都度お早めにお知らせください。本学会ホームページからも「変更・退会届」の書式がダウンロードできますのでご利用ください。

学会誌等送付にはクロネコメール便を利用しますので、転送届けをしても届かない場合があります。変更届は必ずお出してください。

また、ご自宅ポストの表示がない場合も届きませんので、表示も合わせてよろしくお願ひします。

学会誌等が届かないような場合は事務局までご一報ください。

退会届について

退会届の書式は問いませんが、書面(E-mail・FAX・はがき等)でお知らせください。本学会ホームページからも「変更・退会届」の書式がダウンロードできますのでご利用ください。

*次年度から退会希望の方は、必ず1月末までに退会届け出をお願いします。退会連絡がない限り会員継続となり、年会費をお納めいただくこととなります。特に口座引き落としご利用の方で退会希望される方はご注意ください。ただしいかな、会費引き落とし後の退会の会費についてはお返しできません。ただし会費納入年度の学会誌等は送付しますので、十分にご理解いただきたくよろしくお願ひ申し上げます。

学会誌バックナンバー販売のお知らせ

日本助産学会誌バックナンバー第20~24巻は2,500円、25巻は3,500円(各1部)で送料は申込者負担です。在庫に限りがありますのでご希望に添えない場合はご容赦願ひします。

申込み方法は、本学会ホームページから申込書をダウンロードして希望を記入の上事務局宛にE-mail添付送信するか、FAXしてください。

《連絡先》 一般社団法人日本助産学会事務局
〒170-0004
東京都豊島区北大塚3-21-10 アーバン大塚3F
株式会社ガリレオ 学会業務情報センター内
TEL:03-5974-5310 FAX:03-5907-6364
E-mail: g019jam-mng@ml.gakkai.ne.jp
ホームページ: <http://square.umin.ac.jp/jam/>

円滑な事業推進のため、ご協力のほどよろしくお願ひ申し上げます。